
永世の桜

cross-love

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

永世の桜

【Nコード】

N0796K

【作者名】

cross-love

【あらすじ】

10年前に桜の木の下で別れた2人。「10年後にここで待つてるから」その言葉を胸に秘め、お互いが新しい生活に踏み出した。しかし、10年後・・・。

お互いが逢える日を待ち望んでいた日。既に桜の姿が無くなってしまった、その場所で悲劇が襲う。想いはそれぞれの心に響く事はなく、運命の悪戯が2人を翻弄する。

2人は無事に逢えるのか・・・？

約束（前書き）

小説初挑戦です。

書き方に拙い部分もありますが、ご了承ください。

BL要素がありますので、苦手な方は閲覧ご遠慮ください。

約束

「皐月さつき、10年後。この桜の木の下で待ってる」

「・・・玲人れいじ・・・。僕、待ってるから。ずっと、ずっと・・・」

樹齡100年を超えろと言う大きな桜の木の下で、九澄くすみ 玲人は2つ下の恋人・有澤 皐月を強く抱きしめた。まだ冷たさの残る風に乗って、ピンク色の桜の花びらが皐月の癖のない髪に舞い落ちる。肩を小刻みに震えさせ、自分との別れを享受しようと必死に耐えている皐月が愛しくて堪らない。髪におちた花びらをそつと摘み取ると、皐月を上向かせふつくらとした唇に花びらを乗せ自分のそれを重ね合わせる。

「玲人・・・っ」

「桜の精にも誓ったよ。ほら、皐月の唇と俺の唇に挟まれた桜の精が俺達の願いをちゃんと聞き届けてくれた」

薄い花びらはお互いの唇の熱さで半透明に変わってしまったが、皐月は自分の唇に張り付いた花びらをそつと取ると、手のひらに乗せた。本当に桜の精が居たら、10年後に僕達を必ず引き合わせてくれる。そう思いながら、じつと手のひらを凝視する皐月に玲人はクスリと微笑むと「じゃ、行くから」と足元に置いていた大きなボストンバックを持ち上げる。

「えっ・・・もう？僕、まだ・・・」

「もう、行かなきゃ。皐月、身体に気を付けろよ。お前は直ぐにお腹を冷やすから、腹巻は必須だぞ」

「玲人っ！僕はもう子供じゃない！」

「じゃあな。皐月・・・愛してる」

「玲人っ…僕も、愛してる…」

ぷうつと膨れた皐月の頬をそつと撫でると、玲人はもう一度皐月にそつと口づけし、愛の言葉を囁く。皐月の温かい唇の感触と自分と同じ想いを囁き返すトーンの高い声を胸に、玲人は勢いをつけ踵を返すと振り返る事もなく、駅へと続く道を歩き出す。

「玲人っ！待ってるから！…ずっと…待ってるから！」

恥ずかしがり屋で、目立つ事が苦手な皐月が大きな声で叫んでいるのに片手を上げて応える。ここで振り返ったら、自分は皐月の元に戻ってしまう。駆けだして、抱きしめて、そこで押し倒してしまう。それじゃ、東京に出ると決心した意味がない。玲人はいつまでも聞こえてくる皐月の声を振り切る様に、大股で駆けだした。

10年後〜皐月〜

「え・・・」

皐月は目の前に広がる光景に息を飲んだ。10年前、高校生だった自分と玲人が「10年後にここで待つてゐるから」と約束し、大きな桜の木の下で別れたのがつい最近の事の様に見える。片田舎に住んでいた事もあって、高校を卒業するとほとんどの学生は東京の大学へ進学するという風習の中で、2つ年上の玲人もそれに倣い東京の大学へと進学していった。一方、皐月も2年遅れで玲人を追いかけて東京に進学する予定でいたが、両親が関西の大学に進学するのを強く希望した為それは叶わなかった。当時、携帯電話という文明の利器は子供に与えられる事もなく、しばらくは固定電話で毎日の様に近況を伝えあっていたが互いの大学での忙しさが次第に連絡頻度を少なくしていき、ついには連絡すらもなくなってしまっていた。

「あ、あの・・・ここに昔、桜の木があったはずなんですけど・・・」

唯一、思い出の中と一致する古い「タバコ」と書かれた赤い幟がはためいている店に顔を覗かせ、小さな椅子に背を曲げて座っている老婆に声を掛ける。「はあ？」と手を耳にあて聞き返してくる老婆に、大きめの声でもう一度桜の木の存在を確認する。

「ああ、あそこの桜ね。5年くらい前に事業開発に邪魔になるって植え替えられたよ。見りゃ分かるでしょう。あんなバカでかいビル群が建つてゐるんだからさ」

店の奥から老婆の娘と思われる中年の女性が顔を出し、迷惑そうに言ってきた。聞けば、何処に植え替えられたか分からないが、10

0年を超える樹齡の桜を蔑ろには出来ないと言ってきた金持ちそんな人間が根元から綺麗に掘って移植すると言っていたという。

「5年も前に・・・」

「まあねえ、ここの土地も中々買い手がなかったから大手の企業が買収するってなれば、反対も出来ないでしょう。でも、私もあの桜が好きだったから移植されるって聞いた時にはホッとしたけどね。今では、この街も現代風になって…昔の古き良き田舎の風景が懐かしいわ」

大学に進学し、1人暮らしをしはじめてから皐月は両親が夫婦水入らずで外国で住むという事を知り、それ以降バイトで働いて手に入れた携帯電話で連絡を取り合うだけになり、生まれ育ったこの場所がこんなに変わってしまった事を知らないでいた。

「あの、俺。有澤です。10年前までここから少し行った所に住んでたんです。有澤商店って覚えてないですか？」

「…有澤…？ああ、海外に引っ越したご夫婦が有澤さんだったわね。あそこの息子さん？」

「はい、俺、高校出て大阪の大学に進んだんですけど、両親が海外行ってからここの情報が全くなくて、久しぶりに来てビックリしました」

父が祖父の代から受け継ぎ営んでいた商店は、まだ皐月が高校の頃は近隣の町からの客も多く「有澤商店」と言えば、直ぐに通用するくらい名が知れていた。片田舎では、車で30分以上移動しなければ幹線道路沿いの大きなスーパーが無かった為、お世辞にも大きいとは言えない店でも賑わっていたものだ。

「そうだったの。そうよねえ、ここも徐々に廃れていって有澤さん

も息子が全員進学して家を出たから、商売している必要もなくなつたって言つてたのよ。過疎化が進む田舎に居ても仕方ないもの。それで？今日は何でこんな所に来たの？ご両親も居ないんじゃない？人も居ないでしょ？」

皐月が同じ町内にいたと知ると、中年のオバチャンは老婆の隣に置いてある椅子を勧めてきて、お茶菓子片手に興味津津といった様子だ。確かに、用事もなくフラフラと訪れる様な場所でもないし、企業の研修センターの様な大きなビルにもきつとレストランの様な洒落たものはないだろう。

「え・・・っと、ここの桜が好きだったんで、丁度満開の時期だから久しぶりに行ってみようかなー・・・なんて。仕事がちよつと暇になつたから、有給取つて来たんです」

「恋人とここで会う約束してました」とは言えず、皐月はしどろもどろになつて俯く。嘘バレバレかな...と思いつつ、そつと目を上げると「あらあ、それは残念だったわね」と真剣な顔で言ってくるのに、ホツと胸をなで下ろす。仕事が暇なんて事が、この入学・入社の桜の季節にあるわけないのが分からない人で良かったと思う。分かつてて言つていたら、やっぱりオバチャンには敵わない。

「桜が咲いていた場所って、丁度あのビルの前辺りですよね？」

「そうそう。あ、でもね、その桜の場所に石碑が立つてるの。樹齢100年以上の桜だったでしょ？桜の精の呪いがあるとか言つて、そこは聖域みたいになつてるのよ。ビルを立てる時はそりや気を遣つてたけど、今では徐々に範囲が狭くなつてるけどね。今の子達は迷信とか信じないでしょう？でも、ここの土地を買ったオーナーさんはそういう事を信じる人だったみたいね。珍しいって、よく話してたのよ」

<桜の精に誓ったよ・・・>ふいに別れの時の玲人の言葉が脳裏に浮かぶ。小さな桜の花びらをお互いの唇に挟んでキスをした、その時の花びらは今でも大切にしまっている。あの時の言葉が現実になるのは今日なのだ。皐月が大学に入ってしばらくした後、固定電話で話したのを最後に、玲人とは全く連絡を取っていない。一足早く東京に出ていた玲人は直ぐに自分で携帯を手に入れ、自慢そうに番号を教えてくれたが、皐月が携帯を買い久しぶりに電話をした時には「この番号は使われておりません」と空しい機械の声が繰り返されるだけで、1人暮らしの家の番号も回線が生きていなかった。

「俺ちよつと石碑見てきますね」

<桜の精>なんて事を言う人が、玲人の他にも居たという事に皐月は興味を抱いた。この古いタバコ屋からほど近い場所にあるその場所に皐月は早く行ってみたい衝動に駆られ「昼ご飯食べて行くなら用意する」という有り難い申し出にお礼を言うと、その間に行つて来ようと店を出た。

「ここだ・・・」

歩いて5分もしない所に、皐月の腰位まである大理石で出来た石碑が置き石に囲まれて建っていた。毎日手入れされているらしく、置き石の内側の土には綺麗な小ぶりの花が咲いている。昼時が近い事もあって、石碑の側にはビルで働く社員がタバコを吸いながら同僚を待っている姿が見られるが、誰も石碑に関心せずそこだけ異空間の様にポツカリと穴が空いているようだ。

「・・・・・・・・」

石碑の側へ近寄り、グルリと辺りを見渡す。ビルに囲まれ、もう昔の面影が全くない景色にガックリと肩を落とすと改めて石碑に目をやる。

「あ…」

石碑の上部、黒曜石に彫られている文字に皐月の目が釘づけになる。

<桜の精よ。この想い忘れる事なかれ。いつかきつとこの場所で、出会える事を・・・>

「玲人…？」

まさに玲人がこれを書いたのではないかと思うほど、書かれている文面は皐月の胸を突いた。まるで自分に充てて書いた様な言葉にぎゅっと首に架けているペンダントを握りしめる。ペンダントの中にはあの時の桜の花びらが仕舞ってある。何回このペンダントを握りしめ、今日の日を待っていたか。もしかしたら、玲人がどこかで自分を見ていて笑っているのかもしれない。キョロキョロと辺りを見まわしてみるが、それらしい姿は無い。正午の鐘が何処からか鳴り、ビルのあるこちらから会社員が出てくるのに皐月は一旦タバコ屋に戻る事にした。玲人との再会はこんな騒がしい中ではしたくない。10年前18歳だった玲人も、もう28歳だ。きつと会社に勤めているだろうし、こんな早い時間には来ないだろう。皐月はざわざわとビルから出てくる人並みに逆らう様にタバコ屋へと戻っていった。

10年後の玲人

「部長、この書類なんですが・・・」

「ああ、それで構わないよ。明日でも良いから、訂正して提出してくれ」

「はい」

新卒で大手企業の「B & uカンパニー」に入社した玲人は、入社後5年で社内では異例の最年少部長昇格を果たした。常に冷静沈着な玲人は、新人の頃から大きなプロジェクトを任せられ、それを一つのミスもなく完遂してみせた。それが上層部の評判を呼び幾つかのプロジェクトを受け持った後、トントン拍子に係長・課長とエリートの階段を上っていった。

「玲人、今日はこの後予定あるのか？」

同期の葛城^{かつい}が肩に腕を廻して、飲みに誘ってくる。この所、彼女に振られたといつてしよっちゅう玲人を誘っては、居酒屋で飲みつづれるまで酒を呷り玲人に介抱役を頼んでくる。別段、用事もなにもない為、玲人は彼女の想い出話しに付き合っではいつもベロベロの葛城を家へ送る羽目になるが、それも付き合いだと表情を変えずに毎回付き合ってやっていた。

「いや、何も。また酒に付き合えって言うんだろ？いいぜ、付き合いよ」

「そうこなくちな。今日は酔わないから、安心してくれ！」

「・・・どうだか」

バシバシと背中を叩き、嬉しさの表現をしてくる葛城に冷たい視線

で睨みつけると「そんな顔すると美しい顔が台無しだろ」と頬を抓られる。学生の頃からだが、玲人は日本人離れした顔立ちをしていた為大人になった今もたまにそう言ってからかわれる事が多い。玲人自身、気にはしていなかったが美しいと形容するなら皐月の方が断然綺麗だろうと、10年前に別れた恋人を想っていた。

<ずっと、待ってるから・・・>

声変わりを終えたはずなのに、それでも尚高いボーイソプラノの声は今でもハッキリと玲人の耳に残っている。

皐月と出会ったのは高校3年になった年、男子バスケット部の新規募集で皐月が部員として入ってきた時だった。2年時から選手だった玲人は、練習も別枠で取られていた為に新入部員の挨拶時には別の高校との練習試合が控えていてろくすっぽ新入部員を見る事もなかった。早々と挨拶が終わり、練習試合の事ばかり気がいつていた玲人に補欠選手の囁きが聞こえた。「今度の部員。女みたいじゃないか。ちよつと味見、してみるか？」下卑た笑いを浮かべて何人かで囁き合っているのに、野蠻な奴らだと一瞥をくれ玲人はその噂の部員が何処にいるのかとコーチの前に一列に並んでいる新入部員達に目を走らせた。

「・・・」

遠目から見ても、一際目立つ容貌をしているその新入部員は玲人の興味をそそった。練習が終わり、補欠選手の野蠻な行為を阻止するべく、皐月に声を掛けたのが始まりだった。自分より20センチは低く、成長途中とは言えない細く華奢な身体からは、何とも言えない艶めいた雰囲気を出す皐月に、いつしか玲人は同性と言う事も忘れ、皐月に夢中になった。大きな黒目がちな瞳と、ふんわりとした可愛らしい笑顔を自分にだけに向きたい。そんな独占欲が玲人

を支配し、それから皐月を片時も離さずずっと一緒にいた。ただ、皐月には自分が邪な事を考えているなんて微塵も出さなかったが。しかし、それは皐月も同様だったようで、そう時間を掛ける事もなく、2人はお互いの気持ちを打ち明け「恋人」となった。進学の時、東京の大学に行く事が決まっていた玲人は時間の許す限り皐月を抱き、皐月もまた別れの時が来るまで夢中になって玲人を求めた。そして、あの桜の木の下で10年後に逢おうと約束し2人は別れ今に至る。

「おい、何考えてんだ？ぼーっとして」

その10年後が、明日なのだ。皐月はあの場所に来るだろうか。そして、言葉を失い立ち尽くしてしまうだろうか。そう考えると、玲人はすぐさま皐月に逢ってその細い身体を抱きしめたかった。大学の頃、お互いに忙しくて携帯電話を手に入れて番号を得意げに教えてから連絡は全くとってよいほど無くなってしまった。その間に最初に買った携帯が水没し新しい携帯を買った事で皐月との連絡手段は失われてしまったのだ。しかし、10年後にあの場所で逢うという約束は絶対に忘れる事はなく指折り数えては、皐月を思い出していた。

「いや。なんでもない。明日は出張だからな、早目に切り上げる」

「はいはい。今日は酔わないって言っただろ」

出張と言う名のサボリ。部長と言う肩書があっても、玲人は合間を縫ってはあの片田舎に足を運んでいた。

「お前、あそこに出張行くの多いよな。研修センターに行って何してるんだ？まさか、お前が教鞭をふるってるとか？」

「そんなわけあるか。ちゃんと研修してるかとか、研修項目の見直

しとか、色々あるんだよ。部長ともなると忙しいんだ」

自分達が生まれ育った片田舎の土地の半分を、この大企業が大規模な研修センターと保養施設、一部の機能を移転させる為に買い取ったと聞いたのは5年前。丁度上層部に気に入られた時で、視察と一緒に連れて来て貰った。その時、あと5年で皐月と逢うだろう約束の桜の木は、その姿を変える事無く雄大な姿のまま玲人を迎えていた。しかし、上層部が話しているのをじっと聞いていた玲人は、この桜の木が伐採される予定であることを聞き、必死に食い下がった。新入社員に毛が生えた様な若輩者だった玲人だが、事業開発という名目で木を次々と伐採していく企業は後に庶民に背を向けられるから、邪魔であるのなら他の場所に移植するとすれば社の評価もあがるだろうと進言し、伐採される事は免れた。

それから地ならしを終え、いよいよ桜が移植される日、社の社長が伐採に反対した玲人を呼び桜のあった場所に石碑を建てるから何か一句書かせてあげようと言ってきた。上層部が雁首を揃えていた中で、入社1年目の社員が目くじら立てて伐採に反対したのには何か理由があるのだろうと、ずっと気になっていたと言い、玲人はその有り難い申し出に皐月に寄せたメッセージを書いた。誰にも分からない、ただ皐月にだけ分かるメッセージを。

「さすがは部長様ですね。同期で部長を持って嬉しい限りですわ」

肩を竦ませ、ふざけた口調で言ってくる葛城を玲人は更に冷たい視線で一瞥すると、タイムカードを押して来ると言う彼の背中を見送った。

すれ違い

「じゃあ、気を付けて帰るんだよ。もつとゆっくりしていてもいいのに」

建てつけの悪い玄関へ出て、タバコ屋のオバチャンは心配そうな顔で言ってくる。帰りの電車で食べなさいとタッパ―に昼食の残りを丁寧に詰めてくれた包みを受け取り、深々とお辞儀をする。

「いえ、そこまでお世話になる事は出来ません。お昼、ご馳走になっただけでも嬉しかったです。ありがとうございました」

桜のあつた場所の石碑にずっと居たかったが、社会人だったらこんな時間に来るわけがないと思いなおし昼時間の雑踏から逃れる様に戻ってきた皐月に、久々のお客様だからと言ってオバチャンは美味しそうな料理を次々と振舞ってくれた。耳の遠いお婆ちゃんも、次第に皐月の事を思い出した様で「有澤商店」の生い立ちなど、親からも聞いたことがなかった秘話を聞いたりしてあつという間に夕方になってしまった。東京からこの場所まで、幾ら頑張っても2時間はかかる。玲人が来るなら、きつと夜に違いないと思った皐月はその間に思い出の場所を巡ってみようと、タバコ屋の親子の名残惜しそうな見送り言葉に何度も礼をして記憶に残っている道を歩き、初めて玲人と出会った高校の校舎に行ってみる事にした。

「ない・・・」

徒歩で10分程歩き、ほとんど人が住んでいない不気味な気配を感じつつ玲人と2人、肩を寄せあい登校した高校へと続いていた道は途中で「立ち入り禁止」の立て札と共に、校舎ごと無くなっていた。

廃れていった町とはいえ、学校までなくなるとは余程の事だ。オバチャンも、最近が若い人が居なくなり町に残り住んでる人は年寄りとその面倒を見る家族だけだと言っていた。幹線道路の向こうにある、少しは拓けた町の高校と統廃合でもしたのだろうか。桜のあった場所の反対側には、企業で勤める人の為の社宅があるらしく、小学生や幼稚園の子供達の姿がちらほら見えていたから、こちら側は完全に廃墟と化してしまったようだ。

「あの場所も・・・？」

初めて玲人と身体を重ねた皐月にとっては忘れられない場所は、高校があつた場所からほど近い使われていない民宿だつた。そこまで無くなっていたら、今日の約束もしかしたら果たされないんじゃないかと不安になってくる。薄暗くなってきた町に電燈はなく、目を凝らして記憶を辿って歩いていく。

「・・・ここも・・・」

若さゆえ、獣の様に交わり合つた場所。誰も居ない民宿の中で毎日の様に抱き合い、愛を確認した。帰りが遅くなつては親に叱られたが、それでも少しでも離れていたくはなく翌朝になれば2人で隠れてキスを交わす。そんな毎日だつた。そんな思い出の場所も、跡形もなく更地になってしまっている。

「玲人・・・」

ポツンとそこに佇み、愛しい人の名前を呟く。ペンダントに手をやり、ぎゅっと握る。そうする事でいつも、今日と言う日を待ち望み嫌な事も耐えてきた。10年経つた玲人はきつと凄く格好良くなっているはずだ。低いハスキーボイスは、大人のそれに変わりもつと

素敵に自分を震えさせるような声になっているだろう。そんな事を想い、ここまで来たのに。もし、玲人が来なかったら・・・？

「そんなはず・・・ないよな」

日が落ちる速度が速くなり、辺りは真の闇に包まれそうになっている。人が住んでいない事を物語っているように、辺りには一つも街灯がなく皐月は携帯電話の画面を灯りにして来た道を戻る。そんな事はしなくとも、小さい頃から何度も何度も通った道だからか凸凹の道でも皐月は躓きもせずにスタスタと歩いていた。

「・・・」

タバコ屋の前に差しかかる所で、急激に町が拓けたというのが顕著に分かった。タバコ屋から南は電柱は木製で今にも倒れそうになっているのに、北側は普通のコンクリート製で如何に企業の力が大きいというのが手に取る様に分かる。

「そろそろ・・・かな」

拓けている町の北側では、これから帰る会社員がそろそろとビルから出てきては社宅に帰る者、会社が用意している巡回バスのようなマイクロバスに乗ってグツタリと身を沈め出発まで待っている者が大勢いた。これだけ人がいるのに、あの石碑の周りだけは不思議と人がいない。皐月はゆっくりと石碑に近づき、寄り添う様にピツタリとくっ付いて待つ事にした。桜の精に玲人を連れてきてとお願いするように。

「・・・はあ・・・」

ぼんやりと石碑に寄りかかり、ふとビル内のデジタル時計を見ると時刻は7時になるうとしていた。定時で帰った者以外でこのビルに残っているのは疎らの様で、ときおり1人2人と出てきては皐月に目を止める事もなく方々に散っていく。皐月も幾ら遅くても最終電車に間に合う様に駅に行かなければならない。ここまで拓けた町とはいえ、都会の様に宿泊施設があるわけではないからだ。腕時計を見て、後3時間位しかいられないと思い溜息をつく。玲人とて、何処の駅から来るか分からないがそろそろ姿を現しても良い時間だ。この石碑が玲人のメッセージだとしたら、必ずここへ来るはず。なんの根拠もない推測だったが、皐月はそう強く想う事で襲い来る不安と戦っていた。

「玲人・・・来て・・・」

桜の季節とはいえ、夜が深くなると薄着ではまだ冷える。石碑から目と鼻の先にある自販機に目をやると、皐月は小銭入れを出し小走りに自販機に駆け寄って温かいコーヒーを買う。ガチャリと音を立て缶コーヒーが落ちてくるのに身をかがめて取るのと、物凄い勢いで車が自分に向かって突進してきたのはほぼ同時だった。

「うわっ！」

急ブレーキの音と、コンクリに車がぶつかる破壊音、そして自分に何かがぶつかる衝撃に皐月は一瞬にして意識を手離してしまった。

「誰か！事故です！救急車っ！倒れてる人が居ます！！」

ざわざわと音を聞きつけビルや近くの社宅から人が出てくるのに、丁度ビルから帰ろうとした会社員が皐月に気が付き大声で叫ぶ。側に通りかかった男性が携帯で救急車を呼び、皐月の様子を知らせて

いる。ビルの警備員も駆け付け辺りは一時騒然となった。

「誰か、この方のお連れの方は居ませんか？」

救急隊が皐月の応急処置をしながら、遠巻きに見ているギャラリーに問いかける。お互いに顔を見合わせて誰も名乗り出ないのを確認すると、救急隊員は仕方ないと言った様に皐月をストレッチャーに乗せ救急車に乗り込む。通報した男性が付き添うと言い、皐月を乗せた救急車はサイレンを鳴らして去っていった。事故を起こした車の男性は警察にこっぴどく怒られてパトカーに寄せられていく。

「おい、何があった？」

現場検証が終わり、辺りがまたいつもの様相を取り戻した頃、玲人は都内で緊急の会議がありやつの事で辿りついた研修センターの前に散らばるガラスや金属の破片を見、出入り口の警備員に問いかける。

「あ、久澄部長。お疲れ様です。さっき、ここで事故があつて・・・」

「事故？」

「はい、あの曲がり角を曲がり切れずにドカンと。まあ、この辺の子供が巻き込まれたみたいですけど、命には別条ないみたいですよ」「そうか」

「後で警察の方が実況見分があるそうです」と報告を受け、時間を確認する。まだ8時を少し過ぎた位で、皐月が来るなら仕事を終えそろそろ来るだろう。あの石碑には誰も居なかった。役員室に荷物を置き、ブラインドの隙間から石碑が見えるのを確認すると玲人は煙草を取り出し火をつける。紫煙をふうっと吐き出すと、皐月に逢

つて一言目には何を言つて悶えさせてやろうか。と天井を仰ぎみてニヤリと口元を歪ませる。今頃は何処にいるのだろう。懐かしい生まれ故郷に向かって、それよりも自分に逢いに来ているかと思うともどかしい。こんな事なら連絡先を事前に聞いておけば良かったと携帯を意味もなく開閉する。ここに来る最終電車は10時だ。あと2時間余り、愛しい人を待つドキドキとした感情に包まれるのも悪くは無い。そう思うと、玲人は大きな革張りのソファに身を沈め、時折階下の石碑に目をやるという行動を繰り返し、臯月を待ち続けた。

後悔

「10時か・・・」

ビル内は既に誰も居なくなつたようで、警備員が「お帰りにはならないんですか？」と問いかけてきた。「君が後一周りしてきたら帰るよ」そう言つて、帰る用意をする仕草を見ると警備員は苦笑いをして、施錠したそんな顔をしていたが「では、もう一周りしてきました」と言つて暗がりのフロアに戻つていった。カッソカッソと靴音が遠ざかつていく。

「皐月・・・もう、約束自体忘れてしまつたか・・・？」

「ずっと・・・待つてゐるから・・・」

大きな瞳に涙を溜めて繰り返していた皐月。自分が皐月を愛しているように、皐月もまた同じ想いなのだとずっとそう信じてきた。だから10年後の今日もきつと来ると。

「10年は長すぎたか」

せめて5年後にするべきだったかも。今更な事に、玲人の顔に自嘲の笑みが浮かぶ。皐月を養える様な大人になるには、東京へ出るしかない。と大学進学と同時に決意しそれをずっと胸に秘めてきた。そのお陰か、今すぐに皐月を養える位の社会的地位も確立した。それも、自分一人の独りよがりだったのかもしれない。

「久澄部長・・・？」

「ああ、分かつた。今出るよ」

申し訳なさそうな顔でカードキーを取りだし、施錠したいと無言の態度で言ってくる警備員に「悪かったね」と声を掛け、EVホールに向かう。あと2時間、車で待つか・・・「今日」が終わるまで、2時間もある。最終電車はもう行ってしまうているが、何も電車で来るとは限らない。久しぶりに来る生まれ故郷で道も変わってしまったているから、車で来ていたら迷っているのかもしれない。外へ出ると、石碑が目が行く。ひっそりと、それでいてしっかりとそこに存在している石碑は、記憶の中のあの大きな桜の木と同じでいつも自分を迎えてくれる。辺りは人影はなく、玲人はそつと石碑に刻んだ皐月へのメッセージを指でなぞる。

「桜の精・・・。お前はあの約束を聞き届けてくれなかったのか？」

移植した桜は、都内の大きな公園で今もその悠然たる姿を見せ、行き交う人々に癒しを与えてくれている。桜の精も、都内に植え替えられて約束なんて忘れてしまったのだろうか。

「あ、あの。すみません。このビルの方ですか？」

社員専用の駐車場に向かおうと歩を進めた時、この辺りで良く見る青年がおらずと声を掛けてきた。如何にもニートという風体の青年だが、どこことなく社内にいるうだつの上がらない男に似ている気がする。社宅に住む人間だろうか。

「はい。そうですが」

「ああ、良かった。さつき、ここで事故があつて。巻き込まれたっぽい人がこれを落としたんで返したかったですけど。病室からいつの間にか抜け出して・・・。ここに居たって事はこのビルに係ある人かもって思ったんで持ってきたんです」

「俺が付き添ったんですよ。連れがいなかったみたいで」と付け加えて差しだしてきた手には、安っぽい黒い紐に桜の花びらを模ったペンダントトップを通しただけのネックレスがあった。

「これ・・・」

「ぶつかった時に外れちゃったんでしょね。でも、ずっと手に握ってて。治療する時に邪魔だからって救急隊員が無碍にしたんで、俺が持ってたんです」

「ずっと・・・待ってるから・・・」

こんな事があっていいのだろうか。警備員が「近くの子供が巻き込まれた」と言っていたのを鵜呑みにして、どんな人間だったか調べもしなかった。このペンダントの持ち主は間違いなく皐月だ。ペンダントトップは開閉式になっていて、それを開けるとそこには乾燥して茶色に変色した小さな桜の花びらが一片・・・。

「皐月・・・」

「え？」

「何処の病院へ運ばれたんですか？」

「あー、中々受け入れて貰えなくてここから1時間以上も離れた「糸井病院」です。でも、もう居ないと思いますよ？なんせ、俺があれやこれや聞かれている最中に抜け出してるんですから」

俺は、馬鹿だ。皐月が約束を忘れているわけじゃないか。ここに来ていたんだ。ずっと待っていてくれていた・・・。

「・・・取りあえず行ってみます。これはお預かりします。わざわざ、ありがとうございます」

「え、ええ。どうも」

去り際、念の為青年の名前を聞くと案の定、社内にいる中年の男性と同じ名字だった。詳しく話を聞く事もあるかもしれないと言うと「いつでもどうぞ」と返事が返ってきた。

「臯月っ・・・ごめんな・・・」

預かった臯月のペンダントを握りしめ、駐車場へ走って向かいながら呟く。自分がもっと早くここへ来ていれば、事故に遭わずにすんだ。もっと早く臯月と連絡を取る様にしていたらこんな事にはならなかった。玲人の中に様々な後悔の念が浮かんでは消え、自分に対してやり場のない怒りが体中を駆け巡り叫んでしまいそうになる。

「臯月！今、行くからっ！臯月っ」

車に乗り、エンジンを掛ける。急発進するタイヤの地面を擦るけたましい音が辺りに響き、玲人の車は猛スピードで糸井病院がある繁華街に向かっていった。

何かが足りない

目を開けると、白い天井があつた。目だけを動かし、周りの様子を伺う。自分の部屋じゃない事は確かだ。白いカーテンと白い壁、何もかもが白い。

「何処？」

ゆっくりと起き上ると頭と肩がズキンと痛み、思わずウツと呻く。怪我をした記憶もなければ、病院と思しきこの場所に運ばれた記憶もない。自分は一体どうしたんだっけ……？

「あら。目が覚めたの？ 貴方、救急車で運ばれてきたのよ」

てつきり1人かと思つていたらベッドを囲んでいたカーテンが小さく開き、優しそうな顔の女性が首を突っ込んできた。皐月が起きあがつたのを見ると「元気そうね」と微笑み、カーテンを全部開けてくる。部屋の全貌が明らかになると、やはりここは病院でかなり広い大部屋に居る事が分かった。隣にいたこの女性は明日の手術の待機で手術室から近いこの病室に移ってきたが、皐月が運ばれてきたので私は放置されてると可笑しそうに笑つて話してくれた。

「俺、どうして運ばれたか覚えてないんです」

頭に再度手をやると、包帯が巻かれているようでサラサラとした布の感触が指に伝わる。同じく、肩にも大仰に包帯が巻かれていた。

「私に聞かれても分からないけど……。頭、怪我してるから一時的に記憶喪失なんじゃないかしら？ ほら、良く言うつじじゃない？ 事

故の後、しばらく記憶がないけどしばらくすると治るって」

「テレビの見過ぎかしら」とケラケラと笑う女性は、自分のベッドに置かれているテレビを付ける。「貴方も見る？暇でしょ？」と言つて、皐月にも見える様にテレビを向けてくるのにお礼を言つて、丁度ニュースで株価の最終値を読みあげているキャスターの後ろの日付を見る。

「え・・・」

「どうしたの？」

何度見直しても、日付と曜日は平日を示している。救われたのは、明日が土曜で仕事が休みだという所だけだ。では、今日は？金曜だったら仕事が休みなわけがない。着衣を確認するが、病人が着るような水色の浴衣の様なものを羽織っているだけでスーツだったかどうかも確認しようがない。

「俺、仕事が・・・」

事故に遭つたとしても、着ていた服がないのは変だ。皐月は自分が寝ていたベッドの周りをキョロキョロと見回すと、カーテンの外側に私服がハンガーに吊るされていた。お気に入りの私服。

「ちょっと、何してるの？先生呼んだ方がいいんじゃない？」

「いえ、そもいかないんです。俺、仕事休むわけにはいかないんですよ」

若干痛む肩を庇いながら、私服に着替える。仕事だったはずの金曜に何でお気に入りの私服なんて着てたんだろう。皐月は疑問が次から次へと沸き上がるのに詳しく話を聞きたい気もしたが、今は仕事

が一番忙しい時期でゆつくり病院で寝ているわけにはいかない。第一、ここが何処の病院なのかも分からない。

「あの、ここって場所はどこなんですか？」

「ええ？この近所に住んでいるんじゃないの？」

皐月の問いに、女性は近所の人かと思ったと目を丸くし、皐月が生まれた村の近くの住所と病院の名前を教えてくれた。

「え・・・」

今、自分は大阪の商社に勤めている。何で、平日に生まれ故郷なんかに来ていたんだろうか。しかも、既に両親も居なく友達もそれぞれ都内や地方都市に移り住んでいる。こんな所に来る理由はない。

「そつだ」

携帯を見れば何か分かるかもしれない。営業マンとして働いている自分は常にメールで連絡事項の確認をしている。メール受信BOXを開き、今日の日付を中心にみていくが不思議と社内連絡も取引先からの連絡もない。

「・・・とにかく、俺。帰らなきゃ・・・じゃ、失礼します」

「えっ、あ、ちょっと！」

いつも身につけている貴重品や時計が全て揃っているのを確認すると、皐月は病室を出る。ナースステーションの人に見つかるトベツドへ逆戻りだろうと、病室が並んでいる廊下の一番奥の非常階段を見つけてそっと扉を開けてみる。予想通り、非常階段から外へ抜けられる様な造りになっているらしい。皐月はある程度の低さまで階

段を降りていくと、バスケ部で鍛えた身軽さでヒラリと地面に着地する事に成功した。

「痛って！」

頭と肩だけでなく、大腿部も怪我をしていた様で着地した際に激しい痛みが全身に電流の様に駆け巡るのに、その場でしばらく身を固めて痛みをやり過ぐすと、そろそろと歩いていき車が行き交う大きな道路に出る事が出来た。

「取りあえず、駅に……」

生まれ育った故郷から、この幹線道路は車で30分以上かかっていたはずだ。財布の中身と相談して、タクシーを拾う。一番近い駅と言って座席に背を預けると「お客さん、病院から脱走じゃないべ？」と運転手が包帯だらけの皐月を訝しげにジロジロ見てきた。脱走者だったら、自分も責められると警戒しているんだろう。

「違いますよ。事故って治療してもらった帰りです」

脱走って言い方悪いよ……と思いながら、堂々とした口調で言い返す。脱走だと言ったら乗車拒否するに決まっている。「んなら、いいべ」あまりに堂々とし過ぎていたのか、運転手は前を向き直りガラガラと道路を駅に向かって走り出した。

「……」

ふうつと息をつき、皐月は無意識に胸の辺りを手で撫でさする。そこにはいつも何かがあったはずだ。何か自分にとって宝物のような……。何度触っても、そこは自分の包帯で巻かれている胸板がある。

ただで何もない。何かを思い出しそうで、でも思い出せない。一体、
なんだろう……。この変な感じは。皐月は窓に走る景色を見なが
ら、ずっと胸に手を充てていた。

搜索

「え？」

「いえね、私も先生を呼んだら？って言ったのよ。でも、帰らなきやって言って出てっちゃったの」

車を飛ばして、糸井病院に着くとナースステーションの看護師が困り顔で出てきた。「面会時間は終わってますが」ときつい口調で言うてくるのに、2時間位まえに運ばれてきた男性の連れです。と伝えると、益々困った顔になってナースステーションまで通してくれた。「全く、治療費は払って貰ったからいいけど、名前も住所も聞いてないのよ」とブツブツと言うナースが、病室の前からこちらの様子を伺って病室の前に出てきた入院中の女性に向かって「ねえ、佐藤さん。名前言ってなかったんでしょ？」と話を向ける。その女性には皐月が運ばれた病室に居たらしく、心配そうにナースの話を受けて話しだした。

「器用な子よね、あの非常階段から飛び降りて出てったみたいなのよ。細い子だったから身のこなしがよいのかしらね」
「そうよねえ、女の子みたいな可愛い顔してたけど」

玲人をよそに、2人は世間話の延長の様に話します。

「すみません、他には何か言ってませんでしたか？」

入院中の女性にあまり長い時間付き合えずのは気が引けたが、ナースが止めないので何か情報はないかと聞いてみる。「そこに座って話したら？」とナースが言うのに従い、玲人は女性の話す事を聞き逃すまいと真剣に聞き入った。

「そうねえ、なんか記憶が混乱してるみたいで、何でここにいるのか全然分らないって顔してたわよ。とにかく仕事があるから帰らなきゃって言うってたわね」

「仕事が・・・」

「それと、着替えてる時にブツブツと「何で私服なんて着てんだよ」って聞こえたわ。貴方、あの子のお友達なの？だったら、駅の駅員さんに聞いてみたらどっち方面の電車に乗ったか分かるんじゃない？ここを出たのが・・・9時の二ユースの時だったから」

腕時計を見ると、既に午後11時を回っている。幾らなんでも最終の電車が出てしまった後では駅員もいないだろう。女性にお礼を言い、ナースステーションのナースにも時間外に訪ねてしまった非礼を詫びるとナースは名前と住所を聞きたがったが、所在不明でやつと会えると思っていた友人だったと言うと、顔を強張らせカルテや諸々の書類を作成しないといけないから、分かったら教えてと引き攣った笑顔で言うてきた。

「分かりました。では、失礼します」

丁寧に礼をし、外に出ると車に乗り込む。女性に聞いた話から推測すると、皐月は事故のショックで記憶を失っている。とすれば、約束を果たしに来た事すら思い出せないのではないか。

「皐月・・・」

皐月に付き添った男性から預かったペンダントを取り出し、そつと桜の花びらを取り出す。10年の時はあまりにも長すぎた。だが、こうやって皐月が自分を想いここまで来ていたのは間違いない事実だ。そうなれば、自分は何をすべきか。玲人は一しきり考え込むと、

アクセルを踏み暗闇が支配する自分が生まれた場所へ向かった。

思い出

深夜の闇が辺りの微かな灯りさえ飲み込んでしまう。不気味に静まり返った廃屋に玲人は来ていた。車のヘッドライトを付けっぱなしにして廃屋に入りこむと、埃と腐った様な異様な匂いが空気の振動と共に舞い上がって玲人を包む。

「確かここに・・・」

勝手知ったるといふ様な的確な場所を探るのは、自分が生まれ育ち18歳まで過ごした家の離れたったからだ。埃だらけの棚を感覚だけで探っていくと、コツンと硬い物が指先に当たり玲人はあつという顔をし、それを引き寄せる。薄闇で色の判別は出来なかったが、探していた物が見つかり玲人は早々と廃屋を出てスーツに着いた埃を払うと車に乗り込む。エンジンを掛けなおし、取りあえず研修センター前まで戻ろうとアクセルを踏んだ。

「・・・」

研修センターの前まで戻ると、深夜を過ぎた町は街灯だけが空しく輝くゴーストタウンの様で、誰一人歩いていない。普段は駐車禁止の石碑の前に車を止めると、廃墟から持ち出してきた物を広げてみた。10年まで色あせてしまうものなのかと落胆した玲人の視線は、高校の制服を着た皐月と自分が写っていた写真に注がれていた。持ち出してきたのは、一冊の分厚いアルバムでそこには何人もの皐月と自分が写り、時には淫らな格好でこちらに目を向けている皐月の姿もあった。病院の女性の「女の子みたいな可愛い顔」と言う言葉に今の皐月もこの時の様に可愛くて美しいんだとふと笑みが漏れる。

「皋月・・・俺が迎えに行つてやるからな・・・」

皋月を巻き込んだ車の所有者に怒鳴りこんでやりたい気分だったが、その場にいたわけでもない自分が怒鳴りこんでも全く意味がない。それよりも、事故に遭わせてしまったのは自分の所為だと玲人はハンドルを強く叩き、自分を戒める。仕事とはいえ、急遽入った都内での会議なんて他の奴らに任せておけば良かった。何回も自分を責める玲人の目に僅かな涙の光が灯る。

「待つてろ。皋月・・・っ」

記憶を失つて、最悪自分の事を忘れていた場合に見せようと考えたアルバムを助手席に投げ玲人は一路東京に向かった。

「玲人、こんな分厚いアルバム持つて行くの？」

「だって、しばらくはお前の顔見れないじゃないか。これを見て...夜は我慢する」

「・・・夜つて・・・玲人、やらしい！」

東京の大学に発つ3日前。一緒に荷づくりをしていた皋月は片手では持ち上げられない位の分厚いアルバムをカバンに詰めている玲人を見て、不思議そうに聞いてきた。かなりの重さと幅がある為、カバンにアルバムを入れてしまうと他の荷物が入らない位にパンパンになってしまう。

「やらしいか？愛する人を想像して又くのは当然だろ？」

「でも……。あ、じゃあさ、この中から特選のやつだけ持って行けば？俺の色気たっぷりやつ」

「じゃあ……。今から撮ろうぜ。皐月、服脱げよ。俺を誘ってみて」
「えっ……。今あ？」

写真を撮るのが趣味だった玲人は、皐月の提案で大きな一眼レフを取り出し皐月にピントを合わせる。「何で今なんだよ……」とブツブツ言いながらも、制服のままの皐月はスルスルと服を脱ぎ言われるままに全裸になると、大きな玲人の部屋のベッドに横たわる。

「皐月、とびきりイヤらしい格好して俺を誘って？」

「ええっ……。もう……。仕方ないなあ……」

真っ白なシーツの上で、皐月の透き通る様な肌を持つ肢体が蠢きカメラのレンズに向け淫らなポーズを取り始める。まるでグラビアの撮影をしているかのように、玲人は次々と皐月にポーズの指示をしていき、ついにはいつも自分を収めてヒクつく小さな蕾を皐月自身の手で広げさせると、カメラ越しに皐月がはち切れんばかりに自身を硬く張り詰めさせているのを見た。

「お前……。感じてんのか？」

「だってえ……。玲人に見られてると思ったら……。我慢出来なくなっちゃうよ……」

瞳を潤ませて自分を見てくる皐月は、どんな美人の女にも負けない位に艶っぽく婀娜っぽかった。その色香に誘われ、玲人はカメラを放りなげると皐月に覆いかぶさりその後何時間も皐月を愛し、皐月もまた何度も玲人を求めた。

結局、その時撮った淫らで淫猥な写真を現像した玲人はアルバムは

残す事に決め東京にはこの数枚の写真しか持っていかなかった。

「ふふっ・・・若気の至り、か・・・」

高速に入る手前で渋滞に嵌ってしまった玲人は、助手席のアルバムを1ページ毎に捲っていくとそう呟き家に大事に保管してある写真を思い出した。あんな写真を見せたら、思い出すものも思い出せないな。とクスッと笑う。早く逢いたい。自分に逢った時の嬉しそうな顔が早く見たい。もう約束の日は過ぎてしまったが、出来るならあの桜の木の下で再会を果たしたい。玲人は、夜が明け持てる限りの情報網を駆使して皐月の居場所を突き止めようと心に誓った。

知らない名前

「はぁ？ 皐月、お前自分で有休取ったんだろ？ それで、なんで理由を俺に聞くわけ？」

病院から抜け出した後、最終電車にギリギリ間に合った皐月は取りあえず東京まで戻った。明日が土曜日でなければ朝一の新幹線で意地でも帰っていたが、幸い休みという安心感もあって空室のあるホテルを見つけてチェックインし、ベッドに横になった。横になり、落ちつくと自分が仕事そっちのけで田舎にまで来ていた理由を知りたくなり、同期で友人の祐希に連絡をする。

「え？ あ、ああ。そうだったつけ・・・？」

「なんだよ。酔ってんのか？ お前は、この忙しい時期に有休を取って、田舎に帰るって言ってただろ？ 月曜まで休みでごめんね」とか言って、俺を怒らせたの覚えてないのかよ！」

月曜まで有休を取ってたなんて全く覚えがない。それに、祐希が語句を区切って強調してくる位、今の仕事は一番忙しい時期でこんな時期に田舎に帰る理由が見つからない。ついには「お前、俺に何が聞きたいわけ？」と怒り心頭な声が皐月の耳を貫き、慌てて謝ると電話を切った。

「いたい・・・」

電話越しの祐希の声がキンキンと頭に残り、それが怪我の所為か頭痛に発展してしまうと皐月はしばらく両手で頭を抱え丸くなった。目を瞑り、真っ暗の視界の中で「何か」が甦った。一瞬で何か分かんなかったが、東京まで戻る途中に何回か自分に物足りない何かを

感じた時に似ていて必死に頭を巡らす。

「・・・もう一度、行ってみるか」

幸い月曜まで休みを取っているとすれば、後3日は余裕がある。気がついたのは病院だったが、その事故に遭った場所は他にあるはずだ。田舎には久しく行ってなかったし、もしかしたら何か分かるかもしれない。頭痛が治まり、ベッドの上で大きく伸びをすると自分が生まれた場所はどうなってしまったのだらうと思いを巡らせた。

「玲人っ！待ってよ。玲人ってば」

「うるさいな。お前なんて知らねーよ。勝手にしろ」

「玲人い・・・ごめんね？許して？ね？」

「・・・しょうがねーな。ほら」

田舎には珍しい移動式のクレープ屋が高校の正門前に来ているのを知り、1年から3年までのほとんどの学生は授業が終わると挙ってクレープ屋に群がった。皐月もちろん例外ではなく、玲人と共に順番を待つてワクワクとクレープが出来上がるのを待っていた。玲人がご馳走してくれ、それぞれ違う味のものを頼み、2人で食べながら帰り道を歩いていると、お腹を空かせた野良猫がじつと物欲しそうに皐月のクレープを見るのに皐月はしゃがんで一欠けらのクレープをちぎって手に乗せて野良猫に差し出す。美味しそうに食べているのを満足そうに見ていると、脇から子猫を伴った親子の猫も現れ皐月は生クリーム以外の所を全部あげてしまった。皐月に食べて貰う為に奢ったんであって、猫に食べさせたかったわけじゃないと

ムツとした顔になった玲人に、慌てて皐月が謝ると食べかけだった玲人のクレープが無造作に皐月の口に押し込まれ、口の周りにベツトリとついてしまった生クリームをペロリと玲人が舐め取ると、いっししか2人は道端で熱いキスを交わしていた。

「玲人・・・好き」

「俺もだよ、皐月・・・」

「玲人・・・っ」

目が覚め起きあがった皐月は、知りもしない名前を呼んでいた事に夢の中で見た人物の姿を重ねる。2人居た中で、1人は間違いなく高校時代の自分だった。では、もう一人は・・・？

「痛っ・・・」

昨日の今日で、勢いよく起きあがったからか頭が割れる様に痛み出し皐月はもう一度ベッドへ寝そべる。大きく深呼吸をし、痛さをやり過ぐすと再び夢の中の人物を思い出そうと目を閉じる。高校時代、バスケット部に所属していた自分にはいつも隣に居た友人が居たのは覚えてる。いつも、隣に・・・？

「痛えっ・・・！」

何故、思いだそうとすると頭が痛くなるんだ。ズキズキと痛む頭を支えながら、やっぱり昨日の病院へ行って診て貰おうかと考える。

都内の病院でも変わらないが、何処でこんな怪我をしたんだ？と聞かれたら、説明が出来ない。時間を見れば、チェックアウトには丁度良い時間だ。皐月はゆっくりと着替えを済ますと、清算をし外へ出た。土曜日と言う事もあって、駅はごった返している。田舎に行くのに一番早い交通手段を携帯で調べ、皐月は再び生まれ育った場所へと向かった。

乱される心

「すみません・・・」

「全く、怪我してるんですから勝手に抜け出しちゃダメですよ。ほら、ここ血が滲んでるじゃないの」

朝早くにホテルを出て、昨日抜け出した病院へ着いたのはまだ正午にもならない早い時間だった。皐月は、医師やナースのお小言を延々と聞かされ処置室で包帯を巻きなおして貰っていた。

「あの、俺どんな状況で事故ったんですか？何にも覚えてなくて・・・」

「私も詳しくは聞いてないけど、貴方が立っていたビルの前にカーブを曲がり切れなかった車が突進してきたって話してたわね。車は大破して、飛んできた車の破片にぶつかった衝撃で気を失ったのよ。でもこれ位で済んで良かったんじゃない？あ、そうだ。貴方、昨日誰かと待ち合わせしてた？昨夜、貴方が抜け出してから凄いカッコイイ人が訪ねてきたのよ？やっと逢えると思ってた友人なんですって言ってたけど？」

<10年後、この桜の木の下で待ってるから・・・>

「痛っ・・・」

「あら？大丈夫？」

ふいに甦る誰かの言葉。自分にとって、絶対に忘れてはいけな自分の中の自分が警鐘を鳴らす。でも、誰が言っていたのか見当がつかない。

「その人、どこの人だか分かりますか？」

「え？」

「覚えが・・・ないんです。昨日、家からここまで来ていた事すら覚えてなくて」

「・・・。貴方、もう一度事故に遭った所に行ってみたら？事故の前後の事を覚えてないのよね？」

「はい・・・。というか、もっと前から？」

事故に遭ったのが昨日で、有休を出していたのは1カ月前だ。月曜まで休みを取っていたのさえ思い出せないと言う事は、事故云々で1カ月前の記憶も無くしてしまったという事なのか。怪我以外で自分はピンピンしているのに、記憶だけがポツカリと無くなっているのに皐月は気味が悪くなり俯いた。

「やつぱり、少し入院した方がよいのかしら・・・。先生にもう一度診てもらおう？」

「いえ、もう大丈夫です。事故現場、見てきます」

考え込んでいる皐月に、心配になったようなナースは隣にいる医師に声を掛けようとするが、それを制すとお礼を言って処置室を出た。今度こそは保険証を出し、きちんと清算をすると先ほどのナースが出てきて「B & amp; uカンパニー」と書かれた会社案内のパンフレットを差しだしてきた。

「これは？」

「昨日のカッコイイ人、社章がこの会社のだったのよ。5年前からこの辺の土地を買い占めてビル建ててるでしょ。多分、ここに行けば向こうから貴方に気がついてくれると思うの。気を付けてね」

そういえば、自分が関西に進学する時までは無かったような大型ス

パーやガソリンスタンド、果てはファミレス等が病院の並びに建っていた。それらは、皆この企業のグループ会社だ。皐月はナースにお礼を言くと、徒歩では遠すぎる自分が育った場所の近くまで路線バスで移動する事にした。

「昨日の事故、見たかい？」

「ああ、見た見た。おっそろしいねえ」

「私らだったら、あの世行きだねえ」

「んでも、あの石碑は傷一つなかったっていうのも、また凄いやねえ」

タイミング良くバスが来て、乗り込んだ皐月の耳に老人達の会話が聞こえてくる。頭に包帯を巻いている皐月に気がついていてるのかいないのか「事故は怖いやねえ」と締めくくり、自分と同じ停留所で降りていった。古くから住んでいるような感じであったが、皐月が知らない顔ぶれで声を掛けるのは躊躇われた。

「え・・・？」

老人達が自分が住んでいた方向ではなくその反対方向へ歩いていった為、皐月はこの方向は何もなかったはずだと不思議に思い途中まで付いていく。記憶の中のこの場所は、大きな桜の木があって小さい頃は良く木登りをして遊んだものだ。しかし、自分の中で思い描いていた風景は無機質のビルが立ち並んだオフィス街に変貌していた。

「なっ・・・」

確か自分がここを出てから両親も海外に移住した為、10年は経っているがここまで変わってしまったては異世界に迷い込んだよう

な気になってくる。

「あ、君。昨日事故に遭った人だよな？」

綺麗に舗装された道路の前で茫然と佇んでいた皐月に、後ろから「あ、やっぱり」と言いながら駆けてきたのはラフな格好の青年だった。ナースが付き添ってくれた人が居ると言っていたので、軽く頭を下げる。親しみやすそうな青年は、「怪我してるし立ち話もなんだから・・・」とビルとビルの間にひっそりと営業している小さな喫茶店に案内し、皐月を促した。事故に遭った皐月に付き添ってくれたこの青年に聞けば、何か分かるかもしれない。そう思い、まだ痛む頭の痛さに耐えつつゆっくりとした足取りで喫茶店に入っていた。

必ず会えるから・・・

翌朝、ろくに睡眠もとれずに出社した玲人は部長席に着くと直ぐに、懇意にしている警察官僚に連絡を入れた。東京に進学してから、玲人は警察官に憧れしばらく警察署の道場で剣道や柔道の稽古をしていた。何でも飲み込みが早い玲人に、教官は警察学校に推薦してやろうと申し出てきたが両親の反対に遭い、断念した経緯がある。そこで落ち込む玲人に、今後困った事があつたら連絡して来いといつも玲人を心配してくれ、時間がある時は飲みに誘ってくれる人だ。

「あ、松岡さんですか？玲人です。先日は飲みに誘って頂いてありがとうございました。はい、それでちょっとお願いがなのですが・・・。はい、そうです。俺にしたら重要な・・・はい、ありがとうございます。詳しいですが・・・」

玲人が直接連絡をしてきたと、電話口の松岡が嬉々とした口調で「頼みなら何でも聞こう」と言ってくるのに甘え、玲人は詳細を事細かく伝えていく。松岡は、玲人の言う事をメモしているらしく幾度か繰り返して確認すると、所轄の警察署と直接話す様に手配すると言い、しばらく時間をくれと言い残し一旦電話を切った。次いで玲人は、方々の知り合いに連絡し午前中は全て皐月の事で使ってしまった。

昨夜、急遽会議に駆り出された為に約束の桜の場所へ行くのが遅くなり、皐月を事故に遭わせてしまった罪悪感からか、朝から玲人は機嫌が悪かった。ましてや、その会議は自分ではなくとも十分に事足りる位のものだった事から周りも玲人に当たらず障らずと言った風に誰も近くには近寄って来なかった為、余裕で皐月の情報を手に入れる土台は楽々と築く事が出来た。

「よう、機嫌悪そうだな。やっぱり、昨日の会議のせいかな？出張だつーのに、会議に駆り出されて行くのが遅くなった上、帰りも遅くなったって感じ？」

「良く分かるじゃないか」

「分かるって。いつも冷静な玲人が、そんなに恐ろしい顔してんだからよ。昨日、あつた事って言ったらそれ位しかないだろう？」

「ああ、そうだな。昨日の会議は俺が居なくとも十分に進める事が出来た。お前でも良かった位だ。それなのに、引っ張り出されて俺は大事なものを失う所だったんだぞ！」

「まあまあ、落ちつけて。大事なもんがなんだか分からねーけど、それよりお前はこの会社が必要とされてるって事だろ？そんなに冷静さを失うと、見えるもんも見えなく・・・ぐえっ」

周りの制止を聞く事もなく、馴れ馴れしく玲人の元に近寄ってきた葛城は座っている玲人の後ろから覗き込むようにして明るい声で話しかけてきた。そのあまりにも能天気な様子に玲人の眉がピクリと跳ね上がる。それを見ていた、近くのデスクの社員達は葛城が玲人に押さえつけられるのは時間の問題だと冷や冷やした面持ちで事の成り行きを見守っている。それもそのはずで、武道全般をこなしてきている玲人は自分よりも上背がある葛城でさえ、楽々と押さえつける事が出来る。それは歓送迎会などの酒が出る席で何回も目撃されている。それゆえ、葛城も自分が酔いそうな時は玲人を必ず同行させるのだが。そんな事は露とも思わず、物事を素直に行ってくる葛城は玲人の反撃に遭う。

「うるさい。必要とされるのは良いが、下らない会議に付き合わされるのはうんざりするんだ。それなら、お前が部長になるか？私はそれでも構わないが」

「ギブギブ！苦しい！」

首だけを乗り出してくる葛城の首に、一瞬の隙について腕を廻し締め付ける。更に、苦しさに身を乗り上げて暴れている彼を自分の前方へ引き寄せ後ろから羽交い絞めにする。苦しいと暴れている葛城に周りは「やっぱり・・・」と言った風な顔を近くの人間と顔を見合わせて中には予想通りだとクスクスと笑っている者さえいた。

「とにかく、今日は側に寄るな。俺は忙しいんだ」

「・・・げぼっ！お前、手加減、しろ、よな・・・ごぼっ・・・分かりましたよ。今日はもう寄らねーよ」

「そうだ。そうしてくれ、昨日の予定が狂ったから仕事が溜まっているんだ。俺の機嫌が良くなったら来い」

「へいへい」

葛城だけではなく、自分が統括しているフロアに聞こえる様に声を上げる。その尋常じゃない声に辺りは不気味な静けさに包まれ、不貞腐れた様に自席に戻っていく葛城が普段は雑音に紛れ聞こえない椅子を引き力任せに座るこむ音さえハッキリと聞こえた。

仕事に私情を挟むのは社会人では言語道断と言うのは十分に分かっていたが、今の玲人はそれを咎められ降格するのさえ喜んで受けようと思う位、頭の中は皐月の事で一杯だった。

「あ、の・・・松岡様から3番にお電話です・・・」

「ああ、すまない。もしもし？」

静まり返ったフロアに事務員がおずおずと外線が掛ってきた事を消え入りそうな声で言ってきたのに、玲人が受話機を取り話したすと辺りはやっといつもの雑然とした活気を取り戻した。

「はい・・・え？今、ですか？・・・分かりました。感謝します、ありがとうございます」

受話器を握りしめた玲人の顔が僅かに綻ぶ。手元のメモにスラスラと所轄の警察署の電話番号と住所を書き込むと、丁寧に礼を述べ受話器をゆつくりと下ろす。玲人は勢いよく席を立つと、行き先を書き込むホワイトボードに研修センターと書きこみ、その横に赤字で「直帰」と書き加えて側の社員に重要事項以外はデスクに書類を置いておくように指示すると、急いで駐車場に向かった。

（皐月、絶対に・・・会えるからな）

松岡からは、事故現場を実況見分した所轄の担当が事細かに事故の状況を教えても良いと言ってきたと言っていた。救急車で運ばれた被害者は名前は分からないままだったが、たった今治療を受けた病院へ再治療を受けに来ているのを病院側からの連絡にて報告も受けているらしいから行ってみたらどうか？と所轄の署の住所や電話番号を教えてくれた。「礼には及ばないよ」そういう松岡に玲人は「今度は俺が酒の席を設けますね」と応えると、愉快そうな笑い声が聞こえ「早く行ってきなさい」と言い残し電話は切れた。まだ昼になったばかりの時間で、渋滞に嵌っても3時間あれば余裕で着く。それまで皐月があの場合に留まっているか分からないが、車に乗り込み研修センターと皐月が運ばれた病院、その他皐月が行きそうな場所に全て足止めする様に手を打つとハンドルを握りなおし、少しでも早く到着するべくアクセルを踏んだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0796k/>

永世の桜

2010年10月11日15時39分発行